



道の駅大正から国道381号を東へ。対岸にリバーパーク轟のキャンプ場が見え、予土線の鉄橋をくぐる。瀬里である。

瀬里は、2013年7月号でも記したように、戦国期の記録に「瀬里村」「セリ村」と記載され、集落としての歴史の古さを示しているのだが、さらに時代を大きく遡る縄文時代には、すでにこの地に集落があったこともわかっている。現在の集成材工場の南側で、圃場整備が行われていた時に、縄文時代早期のものと推定される土器片などが多数出土している。ちょうど瀬里谷川（瀬里川）が四万十川に注ぎ込むあたりである。

瀬里は江戸期の庄屋制度下では、上岡四ヶ村のひとつであった。（上岡・下岡・四手の川・瀬里）庄屋は上岡に置かれ、その他の3村にはそれぞれに庄屋の部下的存在の名本が配置されていた。名本が不在の場合は上岡の大庄屋が直接支配するという時代もあったようである。

地区の産土神は河内神社で、竈戸神社・金刀比羅神社・鷲神社・八幡宮の四社を合祭している。河内神社は、明治23年の大洪水の時に流出。社地も崩壊してしまったため、同27年に現在の場所に遷宮し、本殿も新築した。

河内神社の南側に小さな建物がある。これは元は宝壽庵という寺であった。この寺は、田野々にある五松寺の末寺で、明治時代初期には「瀬里組合授業場」としても利用された。「授

業場」つまり小学校である。おそらく、他の多くの村がそうであるように、江戸時代には寺子屋になっていたものと思われる。また、文献によれば、国道から瀬里谷川を50mほど入った山裾に茶堂があったということであるが、一旦は国道の脇に移転。その後、建物が老朽化により破損。祀られていた石像は宝壽庵に合祀された。

さて、瀬里にまつわるおもしろい民話がひとつある。幕末か明治初期の頃のお話である。四手の川在住の老婆が葛籠川へ米をもらいに行つた帰りのこと。夕暮れを過ぎたため松明を掲げながら、瀬里の対岸を急いで歩いているうちに、どうやら狸に化かされたらしく、山道を上がった下がつたりを一晚中繰り返させられたという。この様子を、幾人もの瀬里の村人が見ていたそうだ。気の毒なのはこの老婆であつて、とうとう杓子峠まで引つ張り廻されて、あくる朝ようやく帰宅できたということである。



今は高台にある河内神社。ここなら大水の心配はない

町のうごき

(8月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,738	－8	男 2	17	14	7
女	8,481	－5	女 4	8	14	15
計	16,219	－13	計 6	25	28	22
世帯数	8,277	－4	(8月中の届出)			
窪川地域 11,501人 大正地域 2,255人 十和地域 2,463人						

四万十川の水質状況

適正值(mg/l)		9月4日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	測定範囲以下
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	測定範囲以下
化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以下

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部